鴨遺跡出土の荷札木簡

古代役所跡の推定地

高島市鴨（宿鴨・南鴨）集落からJR湖西線にかけて分布する鴨遺跡は、平安時代前期（8～9世紀）の地方役所跡とされる「高島郡衙（ぐんが）」の有力な推定地のひとつです。

この鴨遺跡では、昭和54年に県営ほ場整備事業に伴い発掘調査が実施され、平安時代前期を中心とする遺物が多く発見されました。調査された範囲は、地下の水位が高いことから、本来では残ることが少ない、下駄やしゃもじ、箸、曲物（まげもの）容器、櫛などの木製の日常用品の他、斎串（いぐし）と呼ばれる祭祀に関わる木製の遺物が多く出土しています。この木製品の中で特に注目される遺物に「木簡（もっかん）」があります。

▶鴨遺跡中心地の位置図

出土した荷札木簡

鴨遺跡からは、「遠敷郡遠敷郷（おにゅうぐんおにゅうごう）小丹里秦人足嶋庸米六斗（おにゅうのさとはひとたりしまようまいろくと）」と書かれた木簡（長さ16㎝）が出土しました。

木簡は、短冊状の木板に墨で文字を書いたものです。書き間違った時や書き換えの場合に、その箇所を薄く削り書き直しができることから、当時貴重であった紙の代用として使用されていました。

平城京跡からは、荷札と考えられる木簡が多く出土していることから、鴨遺跡出土木簡も、遠敷郡（現在の福井県小浜市を中心とする地域）から、税として米を送ったことを記した荷札と考えられています。

この木簡に書かれた「庸（よう）」とは、京や畿内以外の人々が都での労役の代わりに布や米を納めるもので、都で働く人々の食料等に充てられていました。米の場合、一人あたりの支給量は1日2升（20合）とされ、当時の暦で30日ある月は六斗（600合）、29日の月は五斗八升（580合）が支給されていました。この支給量に合わせて荷造りの段階で、六斗ないし五斗八升の荷札木簡が使われていたことが分かります。

鴨遺跡の役割

鴨遺跡で出土した木簡は、若狭から京へ運ばれる途中で外されたものか落ちたものかの判断はできませんが、北陸や若狭方面からの物資が、鴨遺跡を経由して運ばれていたことを物語る資料です。

鴨遺跡は、高島平野を南北に通過する古代の北陸道に沿って立地し、古代の港である勝野津とも近接することから、陸路と湖上路の両面を掌握する役目を担っていたものと考えられています。

問 文化財課 ☎（25）8559

鴨遺跡出土の荷札木簡（高島歴史民俗資料館で展示中）

編集雑感

今月号の表紙は東京2020オリンピック聖火リレーで滋賀県第1区間第2走者を務められた森永 ののかさんです。当日は大雨でしたが、トーチの聖火は消えることなく、引き継がれていきました。

そのトーチを掲げたランナーの姿はとても立派で誇らしく、胸が熱くなりました。この感動を少しでも写真で皆さんに伝えたいと思い表紙に採用させていただきました。（Y）

広報たかしま 令和3年7月号 No.258
発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000㈹
http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。